

115

X線発見100年  
西湘放射線技師会創立35周年  
記念特集号

西湘放射線技師会

## 創立35周年を迎えて

会員の皆様、35周年を迎え誠にありがとうございます。

「西湘Xレイ研友会」（昭和35年6月18日発足）から35年そして西湘放射線技師会を結成して（昭和60年11月24日）10年が経過致しました。

今日までの道を拓いて下さった先輩の皆様にあらためて敬意を表すると共に賛助会員の皆様の御協力に感謝申し上げます。

本年はW・Cレントゲン博士の生誕150年と、X線発見から100年の、まさに世紀の慶祝に巡り逢う事ができました。

その幸運と恩恵に深く感謝したいと考えます。

X線は様々な分野に利用され、人類が享受した恩恵も実に大きなものであった事は言うまでもありません。しかしその利用の中で放射線障害による不幸な出来事も残念ながら多く残りました。

そしてX線の利用は今後も続き人類は大きな恩恵を受けていく事でしょう。但し、それには十分な知識と経験を生かして有効かつ安全に利用されてこそ実現されるという前提条件を忘れてはなりません。

言葉をかえれば、その専門家としての一翼を担う診療放射線技師の責務もまた実に大きいものがあります、患者さんの為にもまた自身の健康管理にも配慮しながら、このX線という肉眼では見えない両刃の剣の「名刀」と生涯つき合っていきたいものです。

会員の皆様、また賛助会員の皆様、西湘放射線技師会の更なる発展と相互の研鑽と友好を深めるために、今後とも御協力よろしく御願い申し上げます。

西湘放射線技師会会長 小宮 邦雄

# 一瞬ドッキリ

真鶴町国民健康保険診療所 本郷 隆幸

まだ技師に成りたての頃、先輩の所の病院へ手伝いに行った時のこと、いろいろ案内されレントゲン室に落ち着いた。診療も始まり先輩は忙しそうであった。始めはする事も無いので装置の埃を拭いたり暗室でカセットのフィルム交換、現像等を手伝っていた。

ところが、だんだんと忙しくなり先輩は何やら隣の部屋（透視室）で大きい声を出したり先生と患者さんのほうをやっている様子である。どうもバリウムを飲めないでいるらしい。当時は、部屋を暗くして薄明るい蛍光板を見ながらの透視の為、大変であったのを思い出す。

ひとり「先輩は大変だなあ」なんて思っていた時に、「すみませーん」と看護婦さんの声、手にはオーダー用紙を持っている。

「この方至急でお願いします」と言い残しいってしまった。

見ると、Schambein 恥骨と書いてある。整形の先生、今日は若造が来ているからと考え親切に日本語も書いてくれてある。

手足ならいいのだが、恥骨・・・撮った事がない。先輩は来ないし仕方が無い「〇〇さーん」と呼ぶと20才位の和服の女性、「すみません着物を脱いでこの台の上に横になっていて下さい」と言い残し暗室へカセットにフィルムを入れに行き「えーと恥骨は骨盤の所だから骨盤の条件でいいのだ・・・そうだ」と自問自答しながら出てきてブッキー台の上を見ると、かの女性スッポンボンになって胸からたおやかな純毛のはえているところまで、全部出し横になっているではないか。見た瞬間ドッキリ！我ながら心臓の鼓動がハッキリわかる程で、急に腋の下から汗が流れ出るのを覚えたから「アノォー襦袢やお腰は着ていてよかったですよ」と言い、身に着けてもらった。

今でこそ若い女性の裸の写真が氾濫しているので何とも思わないが、当時はそんなものは無い。まして、本物の若い女性の裸なんて見た事もなかった小生の若い頃である、その驚きと感激、察してもらいたい。いざ写真も出来、水をポタポタたらしながら（当時は手現像である）持って行くと、整形の先生が小生の顔を見ながら「どうだった」と聞く。

???まだ読影なんて無理なのに、すると「違うよ、あの女性」と言う。

あー何かあるなと思ったら「おれもやられたよ」とおっしゃる。診察の時に前をパッとまくって見せられたそうさ。

昔の田舎の女性はおおらかだったのである。この歳になり時々心臓が不調になるのは其の時のドッキリが効いているのかも知れない。



## X線発見100周年記念によせて

小林病院 中静 恒

暑い陽射しであった。スイカ畑の中の道を重いX線ハウベを風呂敷に包んで、汗をふきふき療養所へ足を運んだ昭和28年の夏を何故か思い出されてくる。また、現場では油の中で光輝いているケノトロンの交換や天井の刃形切換スイッチの修理等、今の人達には現物でしか理解されぬ事が多々ありました。国立病院での徹夜でのケーブルブッシングのコンパウンドの流し込み、朝の診療開始迄に間に合わせた事も良き思い出です。

現代の科学と技術文明は20世紀後半の僅か40年位をとっても以前には考えられなかった多くの発明発見の類を生み出し、例えば50年代DNA二重螺旋モデル、スプートニク号打ち上げ・IC開発、60年代通信衛星・カラーテレビ、70年代CTスキャナー、80年代CD開発・エイズウイルス発見等があり、更に今日になれば宇宙量子論の発達や組織的なコンピュータ化がめざましい。

高度な医療機器の開発は診療・医療面に大きく貢献している事は事実としても、各種装置のコンピュータ化でキーボード操作で各種メニューが提示され、人為的ミス介入する余地も少なく、個人の技術の能力差に余り関係なく規格化された医療情報が取り出し可能な昨今である。

勿論こうした機器を習熟する為の努力は私達の義務であるが、機器に使われてはいけない。逆に駆使する様にならねばならぬ。

医学や医療に100%の正しさを患者さんが期待し頼るのです。

皆さん白衣の効用を実感してますか、私達は現場で着用していますが、もし私服で患者さんに接しても患者さんは安心して受け入れてくれません。白衣に身を包んで現場で技術を役立っているからこそ信頼して身を預けて検査に応じてくれるのです。信頼されると同時に責任が生じるのです。少なくとも生身の身体を扱う医療の場では到底100%の完全さは望むべくもない事は、検査や治療を受ける患者さんも分かっているところであるけれども、それを求めるのは『藁を掴みたい』と言う気持ちの現れである。しかしそれに応えるべきは医療人の人間性と技能であり、医療の名の下で

の何者の権威でないといけないと知るべきである。

病む人々に生きる歓びや希望を与えられる様な医療人となる努力をなすべきではないだろうか。

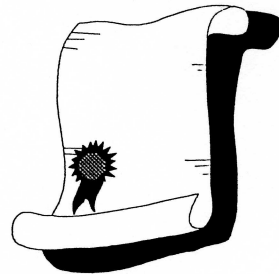
紀元前3世紀にギリシャで活躍したヒポクラテスの論文『古い医術について』の中で『人への愛の在する所にはいつも「癒しの」テクネー（技術）への愛がある』と述べております。これは的確に医学の理想をしめした言葉だと思えます。

現代社会の機構や生活形態からしても学歴優先や偏差値が重視される世の中になりつつある。また、遊びにはTVゲーム・パソコンと大脳の左葉を駆使するほうが多いところから感性と司る右葉との働きの均衡が崩れたぶんにアンバランスな人格が形成される可能性を杞憂する記事を眼にした記憶があるが、これは別としても高度な医療機器を駆使するわれわれ医療人として人間的に大切な心を失って行く要因は数多く存在することを確信しています。

技術や知識の修得研鑽も一義的に大切なことであるが、診療放射線技師として心の豊かな人格形成に努めるべきである。

40年前の自衛隊での女子職員の集団検診の胸部間接撮影を実施した時、

生まれて初めて女子の大群に囲まれてカメラのレンズの内蓋を外さずに撮影、現像してみてビックリ、6×6フィルム10本程白く抜けて撮り直した失敗もあった。若くて純情そのもの青春の1ページ。



# エックス線技師の誕生

神奈川県職員健康管理センター 齋藤 良久

『おおきく息を吸って・・・ハイ止めてください』 駄目だナ もう少し大きい  
声で命令するようにはつきりと言わないと・・・ 患者さんすみませんね・・・  
もう一度やらせてください。 『大きく息をすって・・・ハイ止める』 そのま  
ま現像できるまで腰掛けてまっててください。汗びっしょり 昭和三十年八月の  
ある日 新潟県某会社の付属病院レントゲン室の出来事。

技師学校に入って夏休み、故郷での実習 **初めての撮影** 数日前から現像暗室  
・装置の操作方法を教わり大体出来たところで、明日患者が来るから撮ってみる  
かと・お許しがでた。

病院規模は内科と外科が主で非常勤で皮膚・眼科があり、約五十床・技師が一  
人、会社の付属病院でもあり家族もみてくれていた。

先輩技師は、軍隊経験もあり結構厳しく教えて頂いた。なにしろ年を取っての  
学生・覚えも悪く先輩にとってはやりにくい学生だったことであろう。元に戻っ  
て、患者さんへの号令（といていた）も生まれて初めて、前の晩は、床の中で  
あーもいおう こーもいおうと考えることしきり、ろくろく眠れないくらい真剣  
であった。あれから四十年 厚顔（紅顔）の青年も、早や後進に道を譲って幾星  
霜。

その間に時代は、レントゲンからエックス線・放射線へと進展して目まぐるし  
く変わり、十数年も前からは、パーシェント・ケアが推奨され、命令口調からソ  
フトタッチになり医療自体の考え方も変わってきて、医師中心から患者さん中心  
となり有史以来の大転機を迎え旧態以前の施設は消えていく始末。今までは考え  
られないことであった。

今にして思えば小生その時からパーシェントケアを実践していたのかナ ?  
” マサカ” 一人の技師誕生物語の一卷 オソマツデシタ。

(了)

# 私の中の診療放射線技師

西湘病院 杉山 聖

私が診療放射線技師になって10年が過ぎました。この間、西湘放射線技師会の福利厚生担当理事を2期半（5年間）務めさせて頂き多くの事を学ばさせて頂きました。その中で私が最も驚いた事は多くの会員の方が数多くの講習会・勉強会に出席して常に勉強しているという事実でした。救急病院でしかも救急対応はほとんど自分一人という状況では、勉強よりも現場が大切という考えでいた私にとって勉強の大切さを教えてくれる友人・先輩を与えてくれたのも技師会でした。しかし、未だに勉強は好きになれませんけれども・・・。そんな私が仕事の際、何時も心に留めていることについて述べさせていただきます。

それは”ころ”＝（思いやる気持ち）ということです。技術・知識が最も大切であるという考えの方も多いと思います。しかし、技術・知識は技師という仕事を生活の糧としている以上当然の義務であって、研鑽・努力を惜しんでは技師として失格でしょう。一方、（思いやる気持ち）これは人によって千差万別かもしれません。常に自分が対応した患者さんを、自分自身の子供・妻・夫に、或いは両親・兄弟になぞらえてみる事が出来れば自ずとそれは心の内から湧いてくると思います。そしてその気持ちをもって患者さんと接することで、患者さんに気持ちが通じ、コミュニケーションがうまくとれて、撮影がスムーズに行くことも多く感じます。また、（思いやる気持ち）といっても優しさだけでなく、時には叱り、励ましそして勇気づけることも必要でしょう。特に日々のルーチンというお決まりの仕事の際に流される事なく一枚一枚、そして一人一人に常に心を込めて撮影することが大切な事だと思います。我々技師から見れば多くの患者さんのうちの一人であっても、患者さん本人にとって大切なのは自分自身だけなのですから。撮影枚数があまり多く無いおかげで、前述の点を心に留め、余裕をもって撮影しています。一日に数百枚撮影されている忙しい病院の技師の方々も同じ気持ちで仕事をしていると思いますが、流される事なく、心を込めて頑張りたいと思います。こんな事を書く”がさつなあいつが本当にそんな風に考えているのか？”と思われるかもしれませんが、この10年ちょっと技師会でお世話になり、学ばせて頂いたおかげだと思っています。感謝するとともに、これからの技師会の益々の発展を心からお祈り申し上げます。

# タンク現像から

国立療養所箱根病院 福島 均

X線発見100年、診療エックス線技師法が制定されて44年、西湘技師会35周年、私の放射線に関わっている年数28年、診療放射線技師法が制定されて27年、国立療養所箱根病院に勤務して2年9ヶ月。

私は昭和42年技師学校2部に入学し、個人病院のエックス線技師助手として働き始めたのがこの職業との出会いでした。免許を持った技師はいなかったので、看護婦さんから暗室での作業（フィルムの扱い方、現像処理等であって暗い個室の中で2人だけなのに他のことはありませんでした。）を教えてもらい、撮影は医者から教えてもらいながらのスタートでした。

仕事というものに出会ったのもアルバイトを除けば初めてのことで非常に新鮮で楽しく感じました。自動現像機が普及し始めた時期だと思いますが、そこではフィルムを1枚ずつハンガーにとめてタンク現像をしていました、一度にできる枚数は12～13枚だったと思いますが、70～80枚も処理するとなると、なかなか大変でした。フィルム同士がくっついてしまったり、現像むらが出来てしまったり、乾燥機はなかったので自然乾燥をしていましたが、水分をとばすために消毒用アルコールをくぐらせてみたりもしました。

エックス線テレビ装置はまだあまり一般には普及していなかったので暗室透視でした。

暗順応するための眼鏡を掛けて目を慣らし、暗い中でポーと光っている蛍光板をのぞき込んでバリウムの付着がどうのこうの、病変がどうだこうだと重いプロテクターを着込んで、汗を流しながら格闘していました。

しかしながらセーフライトに照らされてフィルムに絵が浮かんでくる瞬間はかなり感動しましたし、蛍光板に病変を見つけたときの感激は非常に大きいものでした。

現在は自動現像機、エックス線テレビ装置が普及し便利になり、仕



事の質も変化して高度なものとなってきていますが、あの頃のような感動はあまり持たなくなっていると思います。

しかし、この様なちょっぴりのセンチメンタルには関係なく、X線CT、CR、MRI等がそうであったように、新しい機器、高度なシステムはますます導入されてくると思います。

私が経験した28年のわずかな期間においてもおおきな変化であったと思います。新しい高度な機器、高度なシステムが導入され、それに伴って、私たちの仕事の内容はこれからもどんどん変化して、より高度なものになっていくと思われます。

私が出た技師学校の名称は『〇〇養成所』でしたが教育制度も4年制大学、大学院と高度なものとなり、これらの変化に対応できる技師を養成し、社会の要望に応じていくことが私たちの職業の発展に必要なことと思われます。

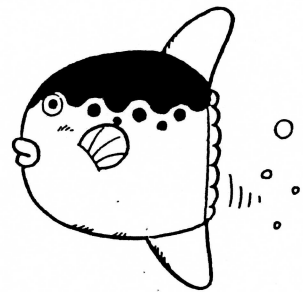
X線の100年は、きんさん・ぎんさんより若い。

診療エックス線技師法制定から50年もたっていない。

診療放射線技師法は、やっとな結婚適齢期。身分法としてはこれから改正されていくと思われるし、業務制限は解除されたり、新しく獲得したりと、我々の職業はもっと変化し発展していくと思います。

国立病院は定年が60歳ですが、後何年か等とあまり考えず、とにかく積極的になれない年齢になってきたけれど、絶えず新鮮な気持ちを持って仕事に取り組んでいきたいと思っています。

少なくとも取り残されるようなことの無いようにと、少し古く、堅くなってきた頭を叱咤激励している昨今です。



## ×線発見100周年によせて

齊藤鍼灸院 齊藤 友三郎

X線の発見から100年、西湘放射線技師会発足から35年の節目を迎えることを会員の皆様と共に喜び申し上げます。

X線の発見によって、現代医学の諸分野の発展は筆舌に尽くすことはできません。この度の西湘放射線技師会が行う記念行事は、後に続く放射線技師の皆様に、放射線医学の歴史、業績を知ってもらうために誠に意義のあることと思います。放射線医学が現代医療の中において重要な地位を占める現在、放射線技師の存在はますます重視され、期待されるでしょう。社会の要望に応え、資質の向上に努めねばと考えます。

翻って、私とX線のかかわりについて述べ、当時の放射線装置の概要を知っていただければと思います。

昭和16年、神田・小川町の電気学校の夜間部に在学しておりましたが、生活費、学費を得るため、現在の清瀬市、当時はまだ駅周辺を除いて一面の雑木林でしたが、その中に幾つかの結核療養所があり、その中の一つ、東京府立清瀬病院（現国立清瀬病院）があり、レントゲン室に私の義兄が東京府の技手（ぎて）として勤務しておりましたので、その伝でそこで働くようになりました。この病院には二つのレントゲン室があり、古い方の第一レントゲン室は天井に剥き出しの高圧線が設置され、これから巻き取り型のリード線を引き出し、撮影と治療ができるようになっていました。ここでは治療が主でしたが、裸の管球をガラスの枠に入れ、X線を照射し、時間の経過とともに対陰極が真っ赤になっていくのが見えました。自然冷却型、またガス管球による撮影も、現在では見ることはできないと思いますが、X線発生時に対陰極に添って青白い光芒を発生する様も印象に残っています。

第二レントゲン室はできてまもなく大日本レントゲン社製の透視、撮影の二管球型500ミリ装置、整流管はキャビネットに収まっていましたが露出型、この頃はまだ機械整流の装置が用いられる処もあり、最新鋭の装置であったと思います。この他にソラレントゲン社製断層撮影装置もありましたが故障が多く使用されたのを見たことはありません。

昭和17年、義兄が千葉県の化学療法研究所病院に転出することになり、私も通学に不便な清瀬から、高田馬場にあった同病院の東京診療所に勤務替えしました。この診療所には、機械整流から整流管方式に変わったばかりの300ミリ型の新しい装置がありました。

この頃から大東亜戦争も激しさを増し、私も終戦時は特攻部隊に身を投じていましたが、敗戦によって生き永らえ、昭和21年1月から、再びX線のお世話になるようになり、昭和53年、全く放射線技師としての職を離れるまで本当に長い付き合いでした。

現在、鍼灸治療をしておりますも、X線を通して得たさまざまな知識は大いに役立っています。エックス線も人類が続く限り不滅でしょう。西湘放射線技師会の皆様のご多幸と、会の益々の発展を祈念して擱筆します。

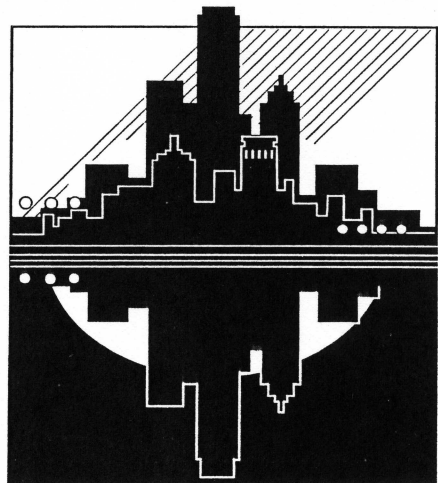
## これからを考えて

神奈川県立足柄上病院 百武亜希子

「私、技師です」。足柄上病院に来て三ヶ月ぐらいこの言葉を何回も言いました。新人で顔を覚えられていなくとも男性であれば相手は話を進めてゆきます。しかし女性だとそうはいかないのです。病院始まって以来の女性放射線技師なのですから無理もないでしょう。女性技師が増えたと言われていますが、それは現今の技師世界の中の事であり、長い歴史からすると医療現場では大病院を除き、まだ技師＝男性なのです。しかしこれからは現場における存在も浸透し、女性技師が増え全体の半分、または半分以上を占める時が来るやもしれません。それまでに装置・物品が小型軽量化され、患者さんの移動や持ち上げはフォークリフトの様な機械が行い、装置が壊れても全て修理は来てもらい、人材派遣システムが確率されて出産育児休暇が取りやすい等々の環境になっているといいなあなどと虫の良い希望を夢んでいます。

でもこれら物理的な面が発達向上していくのならば同時に女性技師も当然技術的、精神的に進歩するべきでしょう。女だからと一歩甘んじるのではなく女だから一歩先を出る様な仕事が出来るように。そして放射線技師は性別を問わない職種となり、女性でもいろいろな摩擦なしに、そのまま解放されて存在できる理想的な人間関係と職場環境になればと考えています。

たわいのない小さな夢ですが夢を見る為の背景となる問題を整理し、現実の正しい認識の上に立脚して正夢が見られる様に前向きな姿勢を持ち続けたいと思います。



## 二重造影と私

小林病院 米山良明

私が技師になって最初に興味を持ったのは消化管の造影でした。先輩技師の撮影する胃の二重造影を隣に座って羨望のまなざしで見つめていました。患者さんを自在に動かし（優しく、解りやすく、適切な指示を伝え）次々と、手際よく写真を撮っていく姿に将来の自分を重ね合わせ、希望と不安とで胸がいっぱいでした。

時が過ぎバリウムで手が荒れる頃になると、一つの思いが頭をよぎり、離れなくなりました。自分は安易に二重造影を撮っている！この撮影法を考えた先生方の努力と苦勞に思いを馳せ、もう少しきれいな写真を撮ろう。なにが工夫できるだろうと考え、まずバリウムを変えてみました。

濃度、粘度、付着性等を意識しながら複数の粉末製剤をミキサーにかけて、高濃度で粘度の低いバリウムをつくりました。（濃度が高ければコントラストがつくし粘度がおさえられればベタつかない）自分の好みのバリウムはできたのですが、コップにあけてみると黒い粉が浮いています。びっくりしてメーカーに問い合わせてみるとバリウムを乾燥させる際に焦げてしまうようで、それが原因であることが解りました。

次に前処置です、ゾンデを入れることができれば胃液の吸引はできるし空気の調節も自在ですが、特に必要と思われた症例には前日にタガメットを一錠服用させ、当日にプロクターゼ P20mgと0.5gの重曹を50mlの微温湯で服用させて数回ローリングさせた後右下にして20分休ませてから撮影を開始する。こんな具合に自分の目で確かめながらやって参りましたが、最近のバリウムは、素晴らしく当時から比べると写真が撮りやすくなったように思われます。

今般、記念特集号の原稿の依頼を受け、このように自分を省みますと、普段は思いも及ばないところで、如何に、先人達の足跡を踏襲し、導かれてきたかを痛感いたしました。改めて感謝の念を抱くとともに御礼申し上げます。

この気持ちを胸に新たなる一步を踏み出したいと思います。最後になりましたが、この機会を与えてくださったスタッフのみなさまに、心より感謝いたします。

# 診療放射線技師4年生になって考える被爆軽減

小田原市立病院 宗像 達也

虫の音も美しい頃、諸先輩方には益々御清栄のことと存じ上げます。私は今まで文章とは縁遠く、あまり筆を執った事がなかったので、駄文ですが勘弁していただければ幸いです。

さて、国際放射線防護委員会（ICRP）の1990年勧告の一部に放射線防護体系（1977年勧告の線量制限体系に代わるもの）があり①行為の正当化②防護の最適化③個人の線量限度が謳われています。今回はその中の行為の正当化と、防護の最適化に当てはめ、被爆軽減について、学生時代に学んだ放射線管理学を振り返りながら考えてみたいと思います。

まず前者についてですが、よく私達の業務の中で外来患者さんから、「先月会社の健康診断で胸の写真を撮ったんですけれども大丈夫でしょうか？」また、入院患者さんのポータブル撮影等でも「昨日も写真撮ったのに、今日も撮るんですか？」聞かれることがあります。私としても疑問に思わない訳ではありませんが、ドクターサイドからの依頼ですし、技師学生時代に通常は、リスク的に患者さんの病気より撮影による非確率的影響の方が少ない場合に検査をすると解釈していたので、大抵患者さんには、「前回よりも今の情報が欲しいので、検査をするんですよ」と伝え理解を求めようにしていました。実際には、行為の正当化は、放射線被爆を伴う行為は被爆する個人または社会に対してそれに生ずる放射線障害を相殺するのに十分な、便益がなければ導入してはならないとされています。ですから、単に重複した撮影を控え患者さんの被爆軽減に務めることが必要だと思えます。

次に後者の防護の最適化についてですけれども、ここでも、被爆軽減を経済的、社会的要因を考慮して合理的に達成できる程度に低く保ち、定められた限定値を超えてはならないと述べられています。国民全体の放射線被爆は医療に伴うものが最も多いのにもかかわらず、医療被爆は法的な制限を受けていません。撮影では写真を数多く撮るほど多くの情報を得て診断はより正確になるでしょう。しかし、情報量は撮影枚数に比例はせず増加に伴い飽和に近づいていきます。ですから、各患者さんにあつた写真枚数を判断し、ドクターサイドに写真枚数の減少のアピールを更に努めることが必要だと思えます。そのことによって患者さんの医療被爆の軽減、ひいては、私達放射線業務従事者の職業被爆の軽減、健康管理につながっていくと思えます。

これからも西湘放射線技師会の益々の繁栄を祈りつつ、診療放射線技師4年生の作文を終わらせていただきます。

# 最近思うこと

小田原循環器病院 岩崎 豊

X線が発見された1895年から、69年後の11月8日に私は生まれました。今こうして、診療放射線技師という職にあるのも、何か運命的なものを感じます。

さて、一口に100年とはいっても前世紀までとは違い、20世紀における100年の間には、自動車が走りロケットが月に飛ぶというような、驚異的に科学技術が進歩した時代だと思います。

放射線技術の領域においても例外ではないことは、日々厚くなる各メーカーのパンフレットの山を見ても実感できると思います。

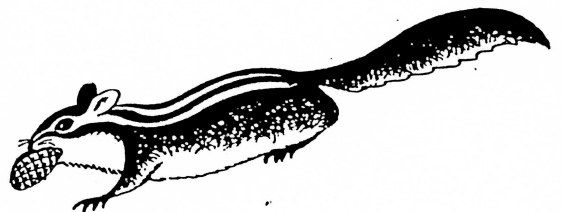
機械は変わる、では、人間はどうでしょう。

とにかく放射線と聞くとむやみに恐がる人が多いのは、放射線と放射能と放射線源の区別を明確にしない、マスコミの報道のせいでしょうか。

NHKでさえ『エックス線技師の〇〇さん』というテロップを流していたのにはガッカリしました。技師会としても、もっと国民に知ってもらおうような活動を考えてみてはいかがでしょうか。

振り返って私自身を見つめてみると、技師免許を取得して1~2年の頃の、X線写真が白いだの黒いだのと言われる段階から、「この患者さんのここの病変をよく見たい」とか「この写真のここの部分はどう思いますか」というようにチーム医療のコメディカルとして活躍出来るように勉強の毎日です。

『〇〇に優しい〇〇』と言われる時代だけに、『患者さんに優しい放射線技師』の気持ちを持って、患者さんの立場に立って物を見て考える仕事をしていこうと思います。



## 西湘放射線技師会 地区歴代役員

年度		氏名	
昭和35年 1960	世話人	飯塚芳郎・斉藤 友三郎	西湘Xレイ研友会
昭和36年 1961	〃	水沢良隆	〃
昭和37年～昭和42年 1962 1968	〃	飯塚芳郎・水沢 良隆	〃
昭和43年～昭和44年 1968 1969	地区委員	新宮功二	小田原・松田地区
昭和45年 1970	〃	中田照男	〃
昭和46年～昭和47年 1971 1972	〃	水沢良隆	〃
昭和48年～昭和49年 1973 1974	〃	渡部隆夫	〃
昭和50年～昭和51年 1975 1976	〃	宗像源二郎	〃
昭和52年～昭和53年 1977 1978	〃	水沢良隆	〃
昭和54年～昭和55年 1979 1980	〃	前原常雄	〃
昭和56年～昭和57年 1981 1982	〃	宗像源二郎	〃
昭和58年～昭和59年 1983 1984	〃	水沢良隆	〃
昭和60年 1985	〃	山田 孝	〃

昭和60年11月会名を西湘放射線技師会と改める。

昭和60年～昭和61年 1985 1986	会長	中静 恒	西湘放射線技師会
	副会長	渡部隆夫	
	監事	前原常雄・宗像 源二郎	
	会計	本郷孝幸	
	地区委員	山田 孝	
	学術	橋本 実・徳安 俊二	
	福利厚生	中根 精・佐藤 洋	
	渉外	小宮邦雄	
	地区担当理事	斉藤良久	

<p>昭和62年～昭和63年 1987 1988</p>	<p>会長 副会長 監事 会計 地区委員 学術 福利厚生 渉外 地区担当理事</p>	<p>水沢良隆 宗像源二郎 杉本津子男・本郷 孝幸 高橋正文 山田 孝 橋本 実・徳安 俊二 中根 精・62年 佐藤 洋 63年 杉山 聖 小宮邦雄 斉藤良久</p>	<p>西湘放射線技師会</p>
<p>平成 1年～平成 2年 1989 1990</p>	<p>会長 副会長 監事 会計 地区委員 学術 福利厚生 渉外 地区担当理事 装置精度管理委員</p>	<p>宗像源二郎 橋本 実 杉本津子男・飯塚 芳郎 小宮邦雄 千葉良助 高橋正文・高野 紀三夫 杉山 聖・和田 明彦 山田 孝・田中 宗夫 1年 斉藤良久 2年 栗田達夫 大和 寅明</p>	<p>西湘放射線技師会</p>
<p>平成 3年～平成 4年 1991 1992</p>	<p>会長 副会長 監事 会計 地区委員 学術 福利厚生 編集 地区担当理事</p>	<p>千安式部 大木達也 飯塚芳郎・小宮邦雄 茂呂 豊 千葉良助 高野紀三夫・坂本 重己 杉山 聖・大内 三次 山田 孝・徳安 俊二 3年 栗田達夫 4年 千安式部</p>	<p>西湘放射線技師会</p>



平成 5年 ~平成 6年 1993 1994	会長 副会長 監事 会計 地区委員 学術 福利厚生 編集 地区担当理事	大木 達也 山田 孝 小宮邦雄・淀江 豊太郎 佐藤 英俊 坂本 重己 高野紀三夫・百武亜希子 中根 精・大内 三次 徳安 俊二・5年 茂呂 豊 6年 福島 均 千安 式部	西湘放射線技師会
平成 7年 ~平成 8年 1995 1996	会長 副会長 監事 会計 地区委員 学術 福利厚生 編集 地区担当理事	小宮邦雄 千葉 良助 中静 恒・宗像 源二郎 和田 明彦 岩倉 健治 坂本 重己・大内 三次 前田 繁一・高岡 憲良 徳安 俊二・高野紀三夫・佐藤 英俊 千安 式部	西湘放射線技師会

X線発見100年記念講演会  
西湘放射線技師会35周年記念祝賀会  
実行委員会

西湘放射線技師会会長 小宮 邦雄  
実行委員長 千葉 良助  
実行副委員長 坂本 重己・前田 繁一

中静 恒・宗像源二郎・大木 達也  
山田 孝・岩倉 健治・和田 明彦  
杉山 聖・大内 三次・高岡 憲良  
浅田 秋男・野地 玲子・渡辺 義巳  
徳安 俊二・高野紀三夫・佐藤 英俊

X線発見100年 西湘放射線技師会創立35周年 記念特集号	発行年 平成7年9月15日 発行所 西湘放射線技師会 編集者 徳安 俊二・高野紀三夫・佐藤 英俊
-------------------------------------	--

## X線発見100年記念&西湘放射線技師会35周年記念式典プログラム

### I、X線発見100年記念講演会 (2時～3時)

司会 大木 達也

開会の辞 千葉 良助 実行委員長

西湘放射線技師会会長挨拶 小宮 邦雄

除幕式(レントゲン博士の肖像)

『X線発見100年を迎えて』 (社)日本放射線技師会元副会長

佐久間 正 先生

休憩

### II、西湘放射線技師会35周年記念式典 (3時10分～4時40分)

司会 大木 達也

西湘放射線技師会会長挨拶 小宮 邦雄

(社)神奈川県放射線技師会会長挨拶 落 利彦

35周年記念講演

『保健所の結核集団検診の思い出』 西湘放射線技師会元監事

杉本 津子夫 先生

西湘放射線技師会会長 小宮 邦雄

功労賞(山田 孝、宗像 源二郎)

感謝状(橋本 実、中根 精、徳安 俊二、高野 紀三夫)

表彰者謝辞 宗像 源二郎

記念撮影 表彰者及び全出席者

閉式の辞 大木 達也

休憩

### III、祝賀会 (4時50分～6時40分)

司会 山田 孝

理事挨拶 千安 式部

乾杯 中静 恒

歓談

宴会余興

閉会の辞 実行副委員長 坂本 重巳